

## 論文要旨

氏名 園部 すみ

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

**現代日本語の従属節選択と複文の類型について**

論文要旨 (別様に記載すること。)

別紙記載

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。  
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。  
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体(1枚)を併せて提出すること。  
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

## 学位論文 要旨

### 現代日本語の従属節選択と複文の種類について

熊本大学大学院社会科学研究所 博士後期課程  
人間・社会科学専攻  
フィールドリサーチ領域  
園部 すみ

2012年12月

#### 【本研究の背景・動機】

現代日本語の複文に関する構造・意味的な研究は、従来、従属節の階層構造や独立度といった構造的な側面に注目した観点から、連用節を中心とした研究が進む一方で、条件文、理由文、並列文などといった意味的種類別の各論的な記述研究も進んでいる。

一方、日本語学習者が日本語の従属節の形式を理解、産出する際の問題を見てみると、そこには母語干渉も含め複雑な要因が関係しており、学習者の母語を考慮した研究の必要性も一層高まっている。

かつて筆者は、台湾の日本語専攻の大学生が書いた約700編の作文を対象とし、他の従属節との選択に関する誤用を分析したが、この調査の背景にも上述のような問題意識があった。たとえば、中国語話者が従属節の形式を選択する際には、「したら」と「すれば」の違いといった連用節の類義表現間の異同のみならず、時には連体と連用に跨るような広い範囲での異同が問題になる。

(1) 自分の家一軒が持てて、幸せなことだと思ふ。 (塩入すみ, 2002)

複数の事態をどのような意味関係として認識し、どのような接続形式を選ぶかは、言語により異同があると考えられる。また、たとえ同じ意味関係として認識していても、それを言語形式として表示するかどうかとも言語により異なるであろう。

このような問題の提起は、日本語以外の言語を参考とした考察により初めて可能になるのであり、日本語の複文研究における他言語との対照研究や、学習者の母語を考慮した習得研究、そして学習者自身による対訳付き学習者コーパス構築などの必要性を示しており、本研究の1つ目の動機となっている。

#### 【本研究の目的】

本研究は、以下の①～③を目的としている。

##### ①【従属節の独立度と文の種類の統合】

従来の複文研究において議論されてきた、従属節の独立度と文の種類という2つの観点からの考察を行うことにより、日本語の従属節と複文に関する、総合的な意味・用法の記述を可能にする。

##### ②【従属節の主題化と事態評価の述語に関する規則性の発見と記述】

従属節の主題化という現象について、事態を評価する述語の用例で具体的に検証することにより、従属節の独立度と文の種類という2つの観点が相互に関連していることを示す。

##### ③【従属節選択における有効な概念の提出】

中国語話者による対訳付き日本語作文のデータを活用して、現代日本語の従属節の選択にかかわる中国語話者の誤用傾向とその具体例についての分析を行い、日本語学習者の従属節選択における有効な概念を提出、検証することにより、日本語教育にも有益な観点から、日本語の従属節に関する、意味・用法の記述を可能にする。

### 【本研究の意義】

本研究の意義として、以下の①～④が挙げられる。

- ① 【文の類型の複文への適用】  
従来の単文研究で進められてきた文の類型という言語普遍的な観点を、日本語の複文において考え、複文の類型が従属節の階層構造と関わっていることを指摘した。
- ② 【文の類型と「従属節の主題化」の関係の解明】  
主文が状態と属性の場合—とくに事態をとる評価の述語（「事態評価の述語」）の場合—に、連用節、引用節、疑問節は、その従属節自体が主題的な役割を果たす現象（「従属節の主題化」）があることを指摘し、いくつかの述語の用法を記述した。
- ③ 【従属節の階層構造の再考】  
従属節の階層構造という言語普遍的な観点を再考し、個々の形式を位置付けると同時に、名詞節や引用節等、連用節以外の従属節の独立度についても記述を加えた。
- ④ 【日本語教育に有意義な文法記述の提示】  
日本語学習者、とくに中国語母語話者にとって、また、日本語指導者にとって、日本語の従属節選択の際にとくに誤用の多い用法に関し、有効な文法記述の1つを示した。

### 【本研究の構成】

本論文の構成は、以下の通りである。

序章では、上述のような本研究の背景と動機・目的・意義について述べている。

第1部では、本研究に関わる先行研究—文の階層構造と文の類型に関する研究—を概観し、本研究の理論的立場を明らかにした。ここでは、従属節の階層構造と文の類型、さらに学習者の母語を考慮した研究において本研究に関連する先行研究を概観したあと、本研究の立場を述べた。本研究の立場については、まず、複文の定義と種類を規定し、各従属節を概観したあと、文の類型と階層構造に関する本研究の立場を述べた。次に、連用節、補足節それぞれの複文の類型がどのように決まるかについて論じた。最後に、従属節の主題化と呼ぶ現象について、その定義と具体例を示し、従属節の主題化に潜在的なものと顕在的なものがあることを述べた。

第2部では、今回筆者が行った中国語話者を対象とした調査を含め、本研究で主に用いた4種類のデータの概要と調査の方法を述べ、調査の結果及び考察を述べた。次に、調査の結果を示し、各従属節の誤用の種類や傾向を見た。

第3部では、第1部の理論的支柱である、文の階層構造と文の類型との関係が、個々の従属節と主文述語の用法にどう反映しているかを考察している。とくに、主題用法の「の/こと」節に関しては、事態評価の述語のとる従属節を実例と誤用例で具体的に示し、それが誤用の選択と関わることを指摘している。

### 【調査結果と考察】

本研究の調査を通じて明らかになった結果とそれに対する考察を、序章で掲げた目標に沿って述べると、まず、①【従属節の独立度と文の類型の統合】については、この2つの観点が独立した概念ではなく相互に関連しており、複文の類型は従属節の階層構造により決定されるという観点を示した。

従属節には、時間節「とき」や目的節「ために」などに「は」を付加した「顕在的主題化」があり、潜在的な主題化とともに複文の類型において状態あるいは状態に近い動きの類型を形成している。一方、感情形容詞などを中心とした評価を表す述語の評価対象として示される「の/こと」+「は」節とほぼ同じ意味的な解釈の可能な従属節は、「潜在的な主題化」と呼べるような役割を果たしており、階層構造において中程度の独立度をもつ従属節が中心となっている。

次に、②【従属節の主題化と事態評価の述語に関する規則性の発見と記述】については、従来の単文研究で進められてきた文の類型という観点を複文において考えた。とくに主節

が事態を評価対象とする述語（「事態評価の述語」）である場合に、連用節や引用節、疑問節はその従属節自体が主題的に解釈される「潜在的な主題化」があることを指摘し、いくつかの述語について具体的にどのような従属節が現れ、複数の従属節の形式が現れ得る場合はどのような違いがあるのかを考察した。

「事態評価の述語」についての考察の結果は以下の通りである。

- 1) 複数事態の述語のとり従属節の条件には、構造的な条件と意味的な条件がある。  
構造的な条件：複数事態の述語のとり従属節は階層構造B類の従属節が中心になる。  
意味的な条件：従属節の事態は原因・理由、条件、時間など因果関係を表す。
- 2) 文の種類について、本稿では心理動詞の位置付けを考慮し、「動き」と「状態」、「状態」と「属性」のそれぞれの境界に「準動き」及び「準属性」を位置付けた。本稿で扱う複数事態の述語は心理動詞や感情表現を中心に、動きから属性まで分布している。また、属性に関しては、単文の名詞レベルの属性の場合と異なり、「同じだ」「本当だ」のような事態の属性を表すものがあることを指摘した。
- 3) 複数事態の述語には、感情表現と評価表現があり、本稿では感情表現の用法を具体的に考察した。感情表現には、①一時的感情を表す動詞、②能動的感情を表す動詞、③直接的感情を表す形容詞、④評価的感情を表す形容詞、⑤評価的感情を表す名詞がある。

以上のように、本研究第3部では、複文の主節における評価の述語を中心とした状態や属性の文を分析の中心に据え、従属節の主題的解釈の問題と関係付けながら複文の種類を提案したが、本研究で取り上げた、従属節の顕在的及び潜在的な主題化という現象は、連用節であっても属性叙述の場合には「主題—解説」構造をとり、従属節が形態的または意味的に主題として機能するものであることから、益岡（2008）による主語と主題に関する言語類型の観点からの主張—日本語が属性叙述を基盤とする言語である—を裏付けるものとなっている。益岡（2008）は、Li and Thompson（1976）の「主題卓越言語（Topic Prominent Language）vs. 主語卓越言語（Subject Prominent Language）」という言語類型を「属性叙述を基盤とする言語 vs. 事象叙述を基盤とする言語」という類型として再考したもので、本研究の考察の結果が今後さらに他言語との対照の必要性や発展の可能性もあることを示唆している。

③【従属節選択における有効な概念の提出】については、上述の「従属節の主題化」、「事態評価の述語」、各従属節の意味にかかわる事実性（個別性）をはじめとする意味概念を提出した。

冒頭で提示した「自分の家一軒が持てて、幸せなことだと思う。」が将来の夢を述べるのに不適切であったのは、「幸せなことだ」という事態評価の述語がその評価の対象として複数の従属節をとることができ、それぞれの表す意味が異なるためである。そして、事態評価の述語がどのような従属節をとり、どのような選択の基準があるのかは、述語の表す複文の種類という構造的な理由（たとえば「安心する」と「安心だ」の違い）と、述語のもつ意味的な理由（たとえば「満足だ」と「不満だ」）という2つの理由によっていることが明らかになった。

最後に、今後の課題は数多くあるが、とくに事態評価の述語の記述について本研究ではごく一部しか分析することができず、評価の述語の下位分類が不十分であったこと、また、事態評価の述語の用法と従属節の主題化に関する中国語の考察も行うべきであったことが挙げられる。残された多くの問題は今後の課題としたい。

以上